

船山馨
茜いろの坂

上

茜 船
し 馨
ろ の
坂
上

新潮社版

© Kaoru Funayama 1980, Printed in Japan

^{あかね}
茜 ^{きか}
いろの坂 (上)

昭和55年9月25日発行

昭和55年11月10日3刷

著 者 ^{みな} 船 ^{やま} 山 ^{かおる} 馨

発行者 佐藤 亮 一

発行所 株式会社新潮社

162 東京都新宿区矢来町71

電話・業務部(03)266-5111

・編集部(03)266-5411

振替 東京4-808

印刷所 二光印刷株式会社

製本所 新宿加藤製本

定 価 1000円

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小
社通信係宛御送付下さい。送料小
社負担にてお取替えいたします。

目次

1	それぞれの黄昏	7
2	事故の周辺	32
3	栈橋にて	62
4	鳥たちのように	89
5	手術室	124
6	標 的	156
7	突然の落日	183
8	死よりの仰角	218

昔
い
ろ
の
坂
(上)

善人なをもて往生をとぐ、
いはんや悪人をや。

親鸞（歎異抄）

1 それぞれの黄昏なそがれ

後頭部の鈍い疼きにつれてやってきた軽い目眩めまいをやり過すごすために、修介は雪道に立ちどまって眼を閉じた。このごろでは珍しいことではなかった。

事実、目眩は来たときと同じようにさりげなく消えてゆき、彼は眼をひらいて、黝くろずんだタイヤ張りの理学部の建物に向かって歩きはじめた。

井岡泰三の研究室は二階の東角にあった。

「よう、戻ったな……。どうかしたのか、あんなところで立ちどまったりして……」

窓から見ていたのであろう、修介が入ってゆくと、井岡は雪灼けした童顔に人懐っこい笑みを拡げて席を立ててきた。

「ちよっと立ちくらみがしてね。雪の反射のせいだろう」

修介はさりげなく応こたえた。自然に、身をかわずような言い方になっていた。

「歳だな、おたがい……」

井岡は冗談めかして首を振ったが、胸ポケットからパイプを抜きながら、

「お前、今夜時間をくれよな」

と彼らしい唐突さで言い出した。

「お前が札幌へ現れることなんぞ滅多にないんだから、北稜会の生き残りが集まろうというんだ。俺を入れて五人ほどだが、みんな愉しみにしている」

北稜会というのは、むかし井岡や修介が属していた旧制中学時代の山岳部の名称であつた。

「弱つたな。突然そう言われても……」

歌志内うたしなの町で母の墓参をすませたら、帰京前にもういち度立ち寄る約束を井岡にさせられていたので寄つたものの、千歳発の夕方の便に乗るつもりで、切符も用意済みであつた。

井岡は好人物だけに、若いころから相手の都合にお構いなしに好意を押しつけるようなところがあつたが、この秋には定年だといふいまになつても、その癖は薄れていないようであつた。年少のころの修介は、井岡の善意がわかつていながら、ときには軽い反発をおぼえたものであつたが、降り積もつた歳月のせいでもあろうか、そのときは素直に心が彼の好意にうなづくようであつた。

「弱るこたアないだろう。古女房が待っているというわけじゃなし、いち日やそこいら帰りが遅れたつて、どうつてこたアないじゃないか」

「それはそうだがね、もう夕方の飛行機の切符も用意してしまつたのでね」

「ちようどいい。その切符には俺のほうで希望者があるから譲ればいい。お前には明日の便を、なんとかこつちで都合する」

「手回しのいいことだ」

修介は苦笑しながらも、急に遠い日の山仲間の少年たちの面影が、あるものは鮮明に、あるものはおぼろげに脳裡に明滅してきていた。

航空券の希望者はかつての井岡の学生で、現在は東京の大学で雪氷学の講師をしている磯村安雄という男のようであった。

網走へ流水の観測に行っていたのが、予定より遅れて昨日札幌まで戻って来たものの、折からの雪祭りで、帰りの団体客が立て混んでおり、切符がとれないでいるのだという。

「やつこさん、ジリジリしているんだ。俺の仲人で結婚して一年足らずの細君に、もうひと月近くも会っていないんだからな。譲ってやれよ、功德になるぜ」

「そんなことを言って、その実もうその男に約束してしまっているんだろう」

「さすが、さすが。ご賢察恐れ入った」

井岡は毛の薄くなった頭を撫であげて、腹を突き出すようにして笑った。

「だが、結婚して間がないというと、若いんだろう」

「三十二だったかな……。たしか二か、三のはずだ」

「それじゃ仕様がなкаろう。航空券には年齢も記入してある。多少の違いならだが、六十五と三十二じゃ話にならない」

修介は苦笑したが、

「いちいち、そんな細かいことまでチェックするもんか。まして雪祭りのうちはどの便も満員つづきで、搭乗カウンターはごった返している。女名前でさえなけりゃ十分さ」

井岡はこともなげに言って、

「君、磯村君がまだ実験室のほうにいるだろう。呼んできてくれんか」

と、傍らの机に向かつていた助手を振り返った。

助手が部屋を出てゆくと、井岡は立ちあがって、自分で珈琲をいれてきた。

「どうだった、歌志内は……。あそこも変わったろう」

古ぼけた長椅子にならんで腰をおろすと、井岡は角砂糖を箱ごと修介のほうへ押して寄越しながら言った。

「うん。町も変わったが、知った人もなくなった。見覚えのある顔といえは菩提寺の方丈くらいのものさ」

「三十年振りじゃ無理もないな。ことに戦後の三十年だからな。とんだ今浦島というわけだ」

「まあな……」

修介はつぶやいて、窓外に視線を移した。

鉛色の空の下に広がっている大学構内の樅もみの木の中に、羽毛のような雪片がスローモーション・カメラに似た緩慢さで舞い落ちてきていた。

「それにしても、わざわざ東京から両親の墓参とは神妙なことだが、すこし唐突な感じでもあるね。またなんだって、いまごろになって急に……」

「今年はおふくろの三十三年なんだね」

と、修介はさりげなく微笑を含んだが、視線は窓外の雪片にそらしたままであった。

修介が以前から父親については固く口をとさしてきたので、過去の事情を知らない井岡は、両親とも歌志内の墓に葬られていると思っ
ていらしかったが、そこに眠っているのは母親だけで、父親の克三はいまもって生死さえ不明のままであった。彼にとって、克三はひそかなタブー

であり、終生の心のしこりでもあった。

「だが、お前も妙な奴だな。三十年も郷里へ足を向けなかったなんて、根が薄情なんだな」

井岡が言ったとき、扉が開いて助手が戻ってきた。それにつづいて、殺風景な部屋のかなかに、不意に大輪の花がひらいたような華やいだ気配がして、先に立った助手を押しつけるような勢いで、ひとりの女が入ってきた。

「よかったわ。切符都合ついたんですって？ 磯村さんの……」

女は修介には眼もくれずに、井岡に軀をぶつけるようにして長椅子に腰を落しながら、弾んだ声をあげた。

磯村という青年が現れるものとばかり思っていた修介は、いくらか気を吞まれたかたちで、井岡に軀を密着させている女と旧友を、それとなく見比べていた。

銀鼠のミンクのオーバーに黒のブーツをはいていた。三十代の終わりか、案外四十を幾つか出ているかもしれない。軀も顔もすこし肉が厚手の感じではあったが、美しいには違いなかった。

「なんだ、来てたのか」

井岡はすこし照れ気味に軀をずらせながら、

「磯村君はどうした」

と、助手に訊いた。

「いま来ますわよ」

女は助手が応える間もなく言って、

「それより切符、何時？ わたしと同じ便？」

「何時の便だ？」

井岡が修介を振り返った。

「十七時五十五分」

「あら、それじゃ、わたしの一便後だわ」

女の声に不満がむきだしになった。

そのときになって、井岡も気がついたらしく、

「家内の治子だよ……。東京の秋山君だ、御挨拶をしないか」

と、軽くたしなめる言い方になった。

「秋山さんて……。それじゃ、こちら銀座の三彩堂さんの……」

夫婦のあいだで時折話が出るのであろう、治子は眼をみはると同時に、無意識にダイヤのある指をひっ込めていた。

それは修介が見ても、べつに隠す必要などのない品物であったが、治子にすれば、貴金属商の肥えた眼にさらすには、いささかカラットが足りなかったのであろう。相当な見栄坊らしい、と修介は一瞬心の隅に苦笑が湧いた。

彼は三、四年前に別れたという井岡の先妻にも会ったことがなかったし、後添いの治子を貰ったことさえ知らなかったが、他人のその種の事柄には関心もなかった。

「私はもう三彩堂とは、あまり関係がないんだ」

急に言葉遣いまで変わって、しきりに店の様子などを訊きたがる治子を持って余し気味になって、修介は井岡を振り返って言った。

「どういう意味だい。あれは君が創^はめて、君があそこまで育てあげた、君の店じゃないか」

井岡もお前から君に変わっていた。

「秋に社長を辞めた。健康に自信がなくなってね」

自分の店といつても、徴々たる時計屋にすぎなかったむかしと違って、日本でも三大貴金屬商のうちに数えられるほどの大商店になってみると、いろいろと内部も複雑で面倒な事情もあったが、それを部外者に洩らすわけにはいかなかった。

「それでどうするんだ、辞めて……」

「会長ということにして貰った。これはいわば飾りもので、閑職だからね」

「お前も変わつてゐるな」

井岡はまたお前に戻って嘆息するような口調になった。

「桑野の二の舞だな」

「桑野がどうかしたのか」

「社長になりかけた途端、新聞社を辞めてしまった。その任にあらず、とか言つてね」
桑野卓弥は北稜会生き残りの一人で、土地の新聞社の専務であつた。むかしから折目の正しい正義派で、修介でさえ友人のなかで彼にだけは以前から畏敬の念を持ちつつづけていた。

「あいつがそうしたのなら、それがいちばんいいことだったのだろう」

と、修介は自分に言い聞かせるように、軽くうなずいてつぶやいた。

そのとき、扉があいて、肩幅の広い、背の高い青年が黙つて部屋へ入ってきた。

「磯村くん、この方が切符を譲つてくださったのよ。こちら、三彩堂の社長さんよ」

治子が椅子から腰をあげて、彼を迎えながら声を弾ませたが、青年はそのほうへは見向きもせず、

「御無理を願つて恐縮です」
と、冷たい儀礼的な態度で修介に黙礼した。

修介が切符を差し出すと、磯村は目早く記載事項を改めてから、無造作にヤッケの内ポケットに落とし込んで、黙って切符の代金を机の上に置いた。

坊ちゃん育ちらしく、無愛想なくせにどこかに甘えたところがあり、弱気と傲慢さが同居している感じであった。

「奥さんと一緒の便でなくて助かった」

磯村は独り言のように言った。

「まあ、ひどい。わたしがお荷物になって？」

「男にとっては、女連れの旅は閉口さ。そのくせ女は自分がお荷物でないと思っっているんだからな。なあ、磯村君」

井岡が冗談めかして口を挟んだが、磯村は応えなかった。それとわかるほどはっきり、彼は井岡を黙殺していた。少なくとも師弟の間柄としては不自然であった。

「さ、出かけましょう、磯村くん。どこかでお茶でも頂いてから、せめて千歳まで送って頂くよ」

治子が立ちあがって、磯村の腕に手をまわした。

「切符、どうも……」

磯村はそう言って、修介にだけ軽く頭を下げると、そのまま治子と一緒に部屋を出ていった。

「さあて、俺たちも出かけるか」

井岡は間の悪そうな薄笑いを、まだ眼尻に残したまま、わざとらしい快活さで立ちあがった。

「お前、荷物は？」

「駅へ預けてある」